

チャイルドラインから 始めてみませんか？

「子どもの話をまるごと受けとめる」から
「子どもの話を聴くことができるおとなを
増やす」へ

僕は教育出版社に勤める普通のサラリーマンです。45歳、既婚。小4と小6の男の子の父親です。こんな僕がどうしてチャイルドライン京都に関わるようになったのか、ご紹介したいと思います。

今から20年以上前、子どもたちのために、いろいろなことを企画していきたくと考え、念願の教育出版社に入社した僕は残念ながら管理部門に配属されました。そして「こんなハズではなかった」と思いながら、コンピュータとのにらめっこを10年以上していました。

そんな僕が念願の「サービスの開発部門」に異動になってハリキっていた時、サービス企画の一つの中で、当時チャイルドライン神戸（現子どもフレンドリーライン・神戸）理事長の羽下先生と知り合い、チャイルド

ラインという活動を教えていただきました。そこで、どうせなら地元京都のことを知りたいとチャイルドライン京都に気軽にメールしたのがきっかけとなりました。

「チャイルドライン」とは？

さて、ここで一度「チャイルドライン」についてご説明しましょう。

チャイルドラインは、18歳までの子どもがかかる子ども専用の電話です。発祥は1970年代の北ヨーロッパです。たとえばイギリスではその電話番号を知らない子どもはいません。お説教ぬき、押し付けぬき、子どもたちの声にただただ耳を傾けます。日本では1998年から始まりました。子どもは、本気で自分の話を聴いてもらえた、



本多 克治

特定非営利活動法人チャイルドライン京都
副理事長

【ほんだ かつじ】1967年京都府生まれ。会社では中小企業の中間管理職として、家では2人のギャングエイジの男の子の父親として仕事に子育てに奔走中。

受けとめてもらえたと感じることであれば、自分自身でその課題と向き合い、乗り越えていく力を持っています。そう信じて、子どもの「ことば」の奥にある「ところ」を受けとめることに全力を傾ける「電話でつながるこころの居場所」が、チャイルドラインです。

2012年2月1日現在、全国45都道府県77の実施団体がチャイルドラインの活動を行っています（ほか、1県2団体が開設準備中です）。

そんなチャイルドラインにかかってくる件数は2010年の集計では日本全国で年間約74万件

18歳までの子どもがかかる電話
チャイルドライン
専用フリーダイヤル 月～土 午後4時～9時
☎ 0120-99-7777

2011年の速報では
アクセス数が
799,713件と
約6万件の増加!!

図表1 チャイルドライン実施状況（2010年度）

実施時間	フリーダイヤル 実施時間	39,106時間（1日あたり107時間）
トラフィック データ	アクセス数	740,143件（1日あたり2,028件）
	かけた人数	304,464人（1日あたり834人）
	着信数	228,487件（1日あたり628件）
	総通話時間	18,752時間（1日あたり51.4時間）
データベース データ	総着信数	229,303件 （うち会話が成立したもの：73,540件）
	平均通話時間	5分24秒 （うち会話が成立したもの：15分00秒）
	かけた人の年齢（会 話が成立したもの）	小学生15%、中学生16%、中卒以上18歳ま で35%、不明29%、未就学・その他5%

出典：チャイルドライン支援センター ホームページ

※「トラフィックデータ」は、電話回線にある交換機を経由して機械的に得られたデータです

※「アクセス数」は0120-99-7777に発信した回数。「かけた人数」はアクセス数のうち、実際に電話
をかけた人数（1人が複数回発信することもあるため、アクセス数と区別しています）

※データベースデータは各現場でとった電話の統計データを集計したものです。フリーダイヤル以外の
電話も含まれます。

チャイルドラインが選ばれるわけ

（図表1）。これほどの件数がかかってくる電話はそう多くはありません。他の電話相談の数と比較すると圧倒的だそうです（件数の比較するのはチャイルドラインの精神から外れるかもしれませんが）。

では、どうして「チャイルドライン」が

選ばれているのでしょうか。

僕はこう考えています。

あなたは悩んだり、落ち込んだりした時、人に話すだけで楽になった経験はありませんか？ 逆に相談したら人からアドバイスされることで、余計に悩んだりした経験はありませんか？ あまり親身になってアドバイスされると、それに従わなければせっかくアドバイスしてくれた人に悪い気になります。そんなことから、後で「相談しなければよかった」と後悔した経験はありませんか？

チャイルドラインは電話という媒体を使っているの、「受け手」（チャイルドラインでは電話を受ける人をこう呼びます）には「電話をかけている人」（子どもたち）のことはわかりません。受け手は原則アドバイスはせずに、子どもをまるごと受けとめ、寄り添うことに全力を傾けます。

つまり、自分の思いを否定されることはありませんし、安心して自分の考えを人に話すことができます。話すことによって不安を取り除き、自信を深めることができます。自信が深まれば、より自信を持って行動できるようになります。結果、上手いけば、その成功談を話すことにより、さらなる自信につながっていきます。

もし、失敗しても、失敗談を話すことで失敗の原因を自己分析できます。そこから生まれた新しいアイデアを話し、それを聴いてもらうことで強化し、リフレッシュして

行動に移すことができるようになります。何度でも同じことを繰り返せばいいのです。

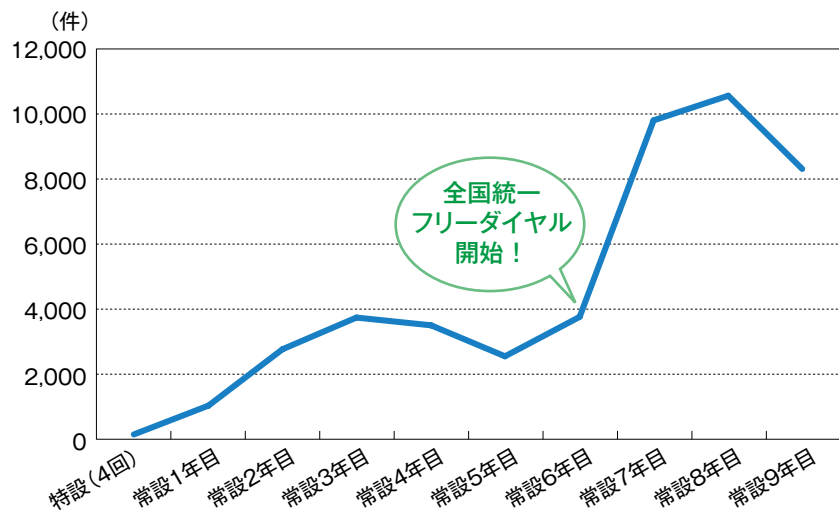
子どもたちは今、現実の社会生活においてこのような体験ができるでしょうか？ 忙しく働いている親は話を聴いてくれるでしょうか？ 忙しく働いている先生は話を聴いてくれるでしょうか？ 子どもたちは「親と子」や「先生と生徒」といった上下関係のある中、自分のありのままをさらけだし、話すことができるでしょうか？

僕自身は自分の子どもが何か話しかけてきても「今、忙しい！」「そんなことより、宿題終わったんか？」「そんなことしゃべっているヒマがあつたら、早く、部屋を片付けなさい」とイライラし、わが子の話がしつかり聴けず、いつも叱ってばかりいます。叱った後は「なんて僕はダメなんだろう」と自分に嫌気がさします。正直、僕にとつて、家でじっくり子どもの話を聴くことはハードルが高い作業です。同じような方は結構いらっしゃるのではないのでしょうか。子どももそんな親や先生には、なかなかゆつくり話すことはできないのではないのでしょうか。

そうです。

親子でも先生・生徒でもない上下関係のない対等な関係の中で、親友やクラスメイトという近しい関係でなく、電話という媒体を通した知らないおっちゃん、おばちゃん、おにいちゃん、おねえちゃん、という距離感において初めて子どもは安心して自分をさらけ出せるのではないのでしょうか？ これ

図表2 チャイルドライン京都着信件数の推移



※常設は12月～11月で集計しています。

※常設7年目(2008年11月10日)より全国统一フリーダイヤルになり、件数が増加しております。

「もしもし、あのね」から始まる 子どもの笑顔事業

チャイルドラインに興味を持ち、少し足を踏み入れた僕を待っていたのが、チャイルドライン京都の面々でした。みなさんと

こそが、チャイルドラインが選ばれる理由ではないかと僕は思っています。
さて、「チャイルドラインに対する想い」はこれくらいにして、話を戻します。

でも明るく、活発で、魅力的な方々でした。いろんなことを教えてもらったし、たくさんの元気ももらいました。

当時、チャイルドラインは今のようフリーダイヤルではなく、あまり電話がかかってくなかつたので、受け手の方も結構ヒマにしていた(図表2)。やはり子どもにとって電話代の問題は大きかったのでしょうか。相談の電話を家ではかけにくいし、携帯電話を持っていたても料金明細を親にチェックされたら困りますから。

そんな中、僕はチャイルドラインの仲間たちにじっくり話を聞いてもらい、会社の企画を進めていました。

そんな僕がチャイルドライン京都に深入りし始めたのは「もしもしあのねからはじまる子どもの笑顔」事業でした。具体的には「子どもたちから絵を集め、チャイルドラインを告知するカードやポスターを作ろう」という企画でした。

当時は知名度もなく、道でカードを配っていると子ども連れのお母さんから「変な物もらっちゃいけません」と子どもが注意されたりと、悲しい思いもたくさんしました。今でこそだんだん知名度も上がっていますが、当時は学校にお願いに行っても「チャイルドライン」を知らない学校の先生もたくさんおられました。

チャイルドラインは守秘義務もあり、なかなか告知できません。その上、電話番号を知ってもらおうとすればするほど、イタズ

ラ電話をかけてくる心ないおとなたち。そのイタズラ電話が、せっかく勇気をふりしぼり、かけてきた子どもたちの電話を「話し中」にしてしまうのです。

そんな中、子どもたちがかけやすく覚えやすい全国统一フリーダイヤルを、少しでも多くの子どもたちに知ってもらおう、それも、子どもたちが作ったカード、ポスターという形で直接伝えようというのが「もしもしあのねからはじまる子どもの笑顔」事業でした。

事業では「チャイルドライン紙芝居」「チャイルドライン漫画ポスター」「タクシーのリアステッカーによる告知」などの活動が日々行われました。パソコンが使えた僕は、活動を紹介するニュースレター作成を担当しました。僕の自宅には、メンバーたちから熱い思いのこもったメールや手書きのFAXが次々に届きました。そんなメンバーに後押しされるように、僕は会社からの帰宅が深夜になってもニュースレターやパンフレットを作成しました。もちろん、その時の入選作はカードやポスターになり、京都府下の高校、中学校、小学校に配られました(図表3)。

同じ頃、落語家・桂塩鯛さんのラジオ番組に出演させていただきました。初めてのラジオ番組出演でスゴイ緊張の中、真っ赤なTシャツを着て「チャイルドラインは、子どもにとって赤ちょうちんのような存在でありたい」と語りました。

図表3 カードやポスターになった入選作



特定非営利活動法人チャイルドライン京都 設立趣旨書

私たちは、2000年以来「チャイルドライン京都・子ども電話」を開設し、京都と全国の子どもの声を聴き、子どもたちに寄り添い、子どもたちをまるごと受けとめて、ほっとできる居場所をつくってきました。しかし、電話を通して子どもたちの自己肯定感の低さやコミュニケーション力の不足を実感します。

これらは、子どもの健全な成長を妨げ、おとなへの警鐘です。

私たちは、この子どもたちの声を受けとめ、地域へつなぎ、社会に発信し、信頼できるおとなの存在を増やし育て、家庭や学校、地域社会の再生をめざします。

何処にでもいるおとなたち、近所のおっちゃん、おばちゃん、おにいちゃん、おねえちゃんなど、ありのままを受けとめてくれるおとなの存在こそが重要なのです。

21世紀を展望し、地域社会が活性化して子どもたちの笑顔があふれ、おとなも子どもも共に心豊かに生きることのできる社会の実現に寄与します。

僕たちおとなは、ストレスがたまれば仲間と赤ちように飲んで飲みに行き、ストレスを発散できます。仲間に話せないことは、お酒を飲んで赤ちようにの大将に愚痴をこぼせばいいのです。しかし、お酒を飲めない子どもたちは、どこでストレスを発散させているのでしょうか。チャイルドラインは、

そんな子どもたちの「赤ちように」のような役割にもなっていると思うのです。

誕生 「NPO法人チャイルドライン京都」

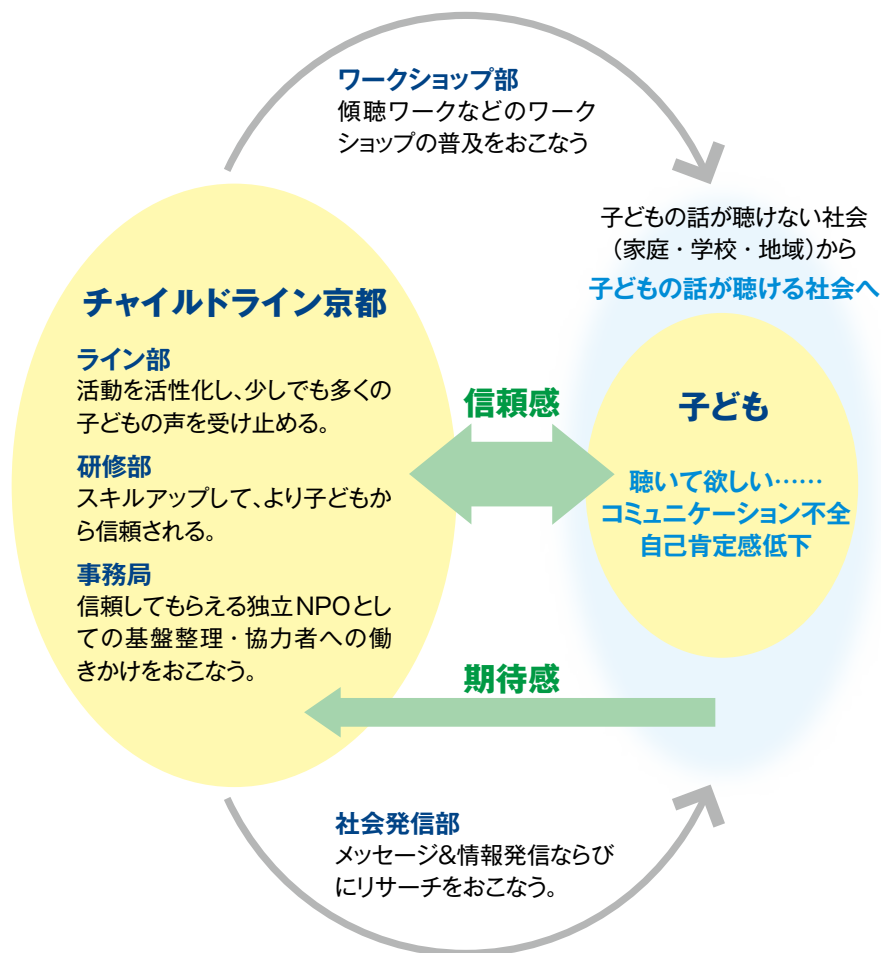
「もしもしあのねからはじまる子どもの笑

顔」事業が終わった後も、我々チャイルドライン京都は、チャイルドライン京都まつりや自己尊重ワークショップ、傾聴ワークショップといった「子どもたちの電話を受けるだけではない、新たな活動」へと踏み出していきました。

そのうちにチャイルドライン京都は「子育て支援の輻輳化」と「チャイルドライン事業としての責任」という目的でNPO法人京都子どもセンターから独立し、NPO法人チャイルドライン京都を立ち上げました。

設立趣旨書には立派なことを書きながらも、僕自身、自分の子どもの話もしっかり

図表4 NPO法人チャイルドライン京都の組織概念図



聴いてあげることができていないし、子どもたちにとってそんなにいい父親じゃないかもしれない。でも、子どもの話をしっかりと受けとめてくれる地域の人がいれば、子どもはしっかりと育つてくれると信じています。

もちろん、父親としてしっかりとしなければいけません。子どもに必要なのは親だけでなく、子どもの成長を見守る目を持ったおとなたちなのです。

チャイルドライン京都は子どもの話をま

るごと受けとめるだけの存在から、子どもの話を聴くことができるおとなを増やし育てると宣言し、チャイルドラインから始まる新しい地域社会をつくることを夢見ているのです(図表4)。

さあ、いっしょに始めませんか？

僕は活動に深入りするうちに、あれよ、あれよという間に副理事長になってしまいま

した。今日もこうして原稿を書いたり、ブログを書いたりして関わっています。

今の僕は、会社生活においては企画的な職場から管理的な職場に戻りましたが、チャイルドライン京都という新しい居場所です。自己実現ができ、充実した日々を過ごしています(僕の居場所には話をしっかりと聴いてくれる方がたくさんいますので、大変恵まれた環境です)。

「子どもの電話の受け手」というとハードルが高いと思われる方も多いでしょう。チャイルドライン京都ではもちろん「受け手」も募集していますが、運営のお手伝いをしてくれる人も(もちろん、寄付をしてくださる方も)募集しています。これからは「子どもの話を聴いてまらんと受けとめることができるおとな」を増やし育てることも徹底的に考えていこうとしています。

僕は思います。

少しでも多くの人、いろんなスタイルで、いろんな角度で、少しずつ関わるのが大事なのです。一人ひとりが半歩足を踏み込むことで、たくさんの方が変わります。大きな「力」になります。僕は気楽に半歩足を踏み込んだつもりが、いつの間にか自分自身を大きく変革していました。自己実現もできました。大事なことは何でも半歩足を踏み入れること、そして続けること。

さあ、みなさんもチャイルドラインから始めてみませんか。